

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(30)

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

牧野遺跡

2002年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町には、多数の埋蔵文化財包蔵地が存在しております。前川、安楽川沿いに縄文時代の遺跡を中心として、約200ヶ所の『周知の遺跡』が存在し、特に縄文遺跡の多さは「縄文銀座」と称され、県下有数の遺跡地として知られています。

これらの遺跡は、農業基盤整備事業あるいは宅地造成等の開発行為により、確認調査並びに発掘調査が実施され、貴重な考古資料が提供されております。また、調査後の研究によって遺跡の性格等も解明され、志布志における太古の生活の姿が明らかにされつつあります。

本書は、志布志町における県営中山間地域総合整備事業に伴う、牧野遺跡の確認調査報告書であります。

牧野遺跡では、縄文時代早期の土器が確認され、縄文時代後期の土器と共に1基の竪穴状遺構も確認されました。

その他の出土遺物や遺構の調査・整理を行い、ここに、その成果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり指導者並びに作業協力者の皆様、また調査に御協力いただいた作業員の方々、並びに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

志布志町教育委員会

例 言

1. この報告書は、志布志町による県営中山間地域総合整備事業に伴う牧野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査における実測及び測量、写真撮影は、主に小村が行った。
4. 調査の実施にあたっては、鹿児島県教育庁文化財課の指導・教示を受けた。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 遺物番号については、通し番号とし、挿図・図版とも一致している。
7. 出土遺物は志布志町教育委員会で一括保管し、公開展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は小村・大窪が行った。

報告書抄録

ふりがな	まきの いせき					
書名	牧野遺跡					
副書名	県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第30集					
編著者名	小村美義・大窪祥晃					
編集機関	志布志町教育委員会					
所在地	〒899-7192 鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号 0994-72-1111					
発行年月日	平成14(2002)年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
まきのいせき 牧野遺跡	かごしま 鹿児島県 そお 曾於郡 しぶし 志布志町 たのうら 田之浦 まきの 字牧野	68	72	平成10年 4月27日～ 5月19日 平成11年 3月8日～ 3月18日	90m ²	県営中山間 地域総合整 備事業牧野 地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
牧野遺跡	散布地	縄文早期 " 中～晩期	竪穴状遺構	早期土器 阿高式系土器 市来式土器他		

本文目次

序文

例言

報告書抄録

目次

第 I 章	調査の経過	1
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	調査の組織	1
第 3 節	調査の経過	2
第 II 章	遺跡の環境	5
第 III 章	調査の概要	11
第 1 節	基本土層	11
第 2 節	調査の概要	12
第 3 節	遺物・遺構	17
第 4 節	総括	21

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡位置図	6
第 2 図	トレンチ配置図(施工前)	7
第 3 図	トレンチ配置図(施工後)	9
第 4 図	土層柱状図	11
第 5 図	トレンチ断面実測図	14
第 6 図	トレンチ平・断面実測図	15
第 7 図	10トレンチ平・断面実測図	16
第 8 図	4トレンチ遺物実測図	17
第 9 図	5トレンチ遺物実測図	17
第10図	8トレンチ遺物実測図	18
第11図	9トレンチ遺物実測図	19
第12図	10トレンチ遺物実測図	20

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	土器観察表	23

図 版 目 次

図版1	遺跡近景	25
図版2	作業風景	26
図版3	遺物出土状況	27
図版4	遺物出土・遺構検出状況	28
図版5	土層断面	29
図版6	出土遺物(4・5・8トレンチ)	30
図版7	出土遺物(9トレンチ)	31
図版8	出土遺物(9・10トレンチ)	32

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

鹿児島県教育委員会(以下、県文化財課)では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、各関係機関との間で、事業地区内における文化財の有無及びその取扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部(農地整備課・大隅耕地事務所)は、志布志町田之浦字牧野における県営中山間地域総合整備事業の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、県文化財課に照会した。

これを受けて、県文化財課は平成9年3月、当該地区の埋蔵文化財分布調査を志布志町教育委員会と共に実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に牧野遺跡が存在していることが判明したため、事業実施前に遺跡の範囲・性格等を把握するための確認調査を実施することとなった。

確認調査は、平成10年4月27日～5月19日(前期)、平成11年3月8日～3月18日(後期)の2期間に渡り、志布志町教育委員会が調査主体となり、県文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得て実施した。

第 2 節 調査の組織

(平成10年度)

調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	”	教 育 長	早 水 秀 久
調査調整	”	社会教育課長	渡 辺 純 幸
調査事務	”	社会教育係長	恒 吉 修 二
	”	主 査	小 村 美 義
	”	主 事	濱 田 優 子
	”	主 事	坂 元 正 知
	”	主 事 補	下 出 克 也
調査担当者	”	主 査	小 村 美 義

(平成13年度)

調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	”	教 育 長	早 水 秀 久
調査調整	”	社会教育課長	山 裾 信 博
調査事務	”	社会教育課長補佐 兼社会教育係長	米 元 史 郎 (平成13年12月31日まで)
	”	社会教育係長	杉 田 美 保 (平成14年1月1日より)
	”	主任主査	仙 田 利 久 子 (平成13年12月31日まで)
	”	主 査	児 島 奈 穂 子 (平成14年1月1日より)
	”	主 査	小 村 美 義
	”	主 事	下 出 克 也
	”	主 事 補	大 窪 祥 晃 (平成13年5月1日より)
調査担当者	”	主 査	小 村 美 義
		主 事 補	大 窪 祥 晃 (平成13年5月1日より)

第3節 調査の経過

確認調査は、平成10年4月27日から5月19日(前期)と平成11年3月8日から3月18日(後期)の2期間に渡り実施した。その間の調査経過と概要については、日誌抄をもってかえることとする。

①【前期】

4月27日(月)～5月1日(金)

用具運搬,点検及び確認。作業員への調査方法,調査上の留意点等説明。

3～6トレンチ設定,調査開始。海拔高設定。トレンチ位置平板実測。土層断面線引き。

3トレンチ完掘。

5トレンチ遺物出土状況平板実測,写真撮影。

5月6日(水)～8日(金)

- 2, 7トレンチ設定。海拔高設定。
- 3トレンチ土層断面実測, 写真撮影。
- 4, 5トレンチ完掘。土層断面実測, 写真撮影。

5月11日(月)～15日(金)

- 1トレンチ設定。海拔高設定。トレンチ位置平板実測。埋め戻し。
- 2トレンチ位置平板実測。完掘。埋め戻し。
- 3トレンチ埋め戻し。
- 6, 7トレンチ完掘。土層断面実測, 写真撮影。

5月18日(月)～19日(火)

- 4～6トレンチ埋め戻し。
 - 7トレンチ土層断面実測, 写真撮影。埋め戻し。
- 前期全行程終了。機材撤収。

②【後期】

3月8日(月)～12日(金)

- 用具運搬, 点検及び確認。作業員への調査方法, 調査上の留意点等説明。
- 8トレンチ設定。トレンチ位置平板実測。海拔高設定。遺物出土状況平板実測。
 - 9, 10トレンチ設定。遺跡遠・近景写真撮影。遺物出土状況平板実測。
 - 11, 13, 14トレンチ設定。海拔高設定。トレンチ位置平板実測。
 - 15トレンチ設定。調査開始。
 - 16トレンチ設定。海拔高設定。トレンチ位置平板実測。完掘。

3月15日(月)～18日(木)

- 8, 9トレンチ土層断面実測, 写真撮影。遺物出土状況平板実測, 写真撮影。埋め戻し。
 - 10トレンチ遺物出土状況写真撮影。土層断面写真撮影, 実測。埋め戻し。
 - 11トレンチ土層断面実測, 写真撮影。埋め戻し。
 - 12トレンチ設定。トレンチ位置平板実測。土層断面写真撮影, 実測。埋め戻し。
 - 13～15トレンチ完掘。土層断面実測, 写真撮影。埋め戻し。
 - 16トレンチ土層断面実測, 写真撮影。埋め戻し。
- 後期全行程終了。調査終了。機材撤収。

第Ⅱ章 遺跡の環境

志布志町の内陸部、北部から東部にかけては山地と台地とで構成される。主流となる安楽川をはじめ、並行するように南流する大小の河川の浸食によって、シラス台地は深い谷で分断され、大小多数の台地が形成されている。

牧野遺跡は、志布志町中心部より北東に約14kmの末吉町境に位置する。遺跡は、北から南に流れ、緩やかに大きく蛇行する、安楽川上流の河岸段丘上に立地する。台地上は北側から南側に向い傾斜が認められる。従来、表採とされる縄文土器や弥生土器の細片、石斧等によって、『周知の遺跡』として認識されていたが、詳細な調査は行われていなかった。今回の調査によって、牧野遺跡が広範囲に存在することが確認され、遺跡の時期も特定された。

牧野遺跡の周辺、安楽川上流域の遺跡としては、同じ台地上に位置する尾口遺跡、内門遺跡、安楽川を挟んだ対岸の台地上に牧原遺跡、吉原遺跡、倉野遺跡が確認されている。また、安楽川に沿ってさらに南には板山遺跡、白木原遺跡、白木八重遺跡等が立地している。

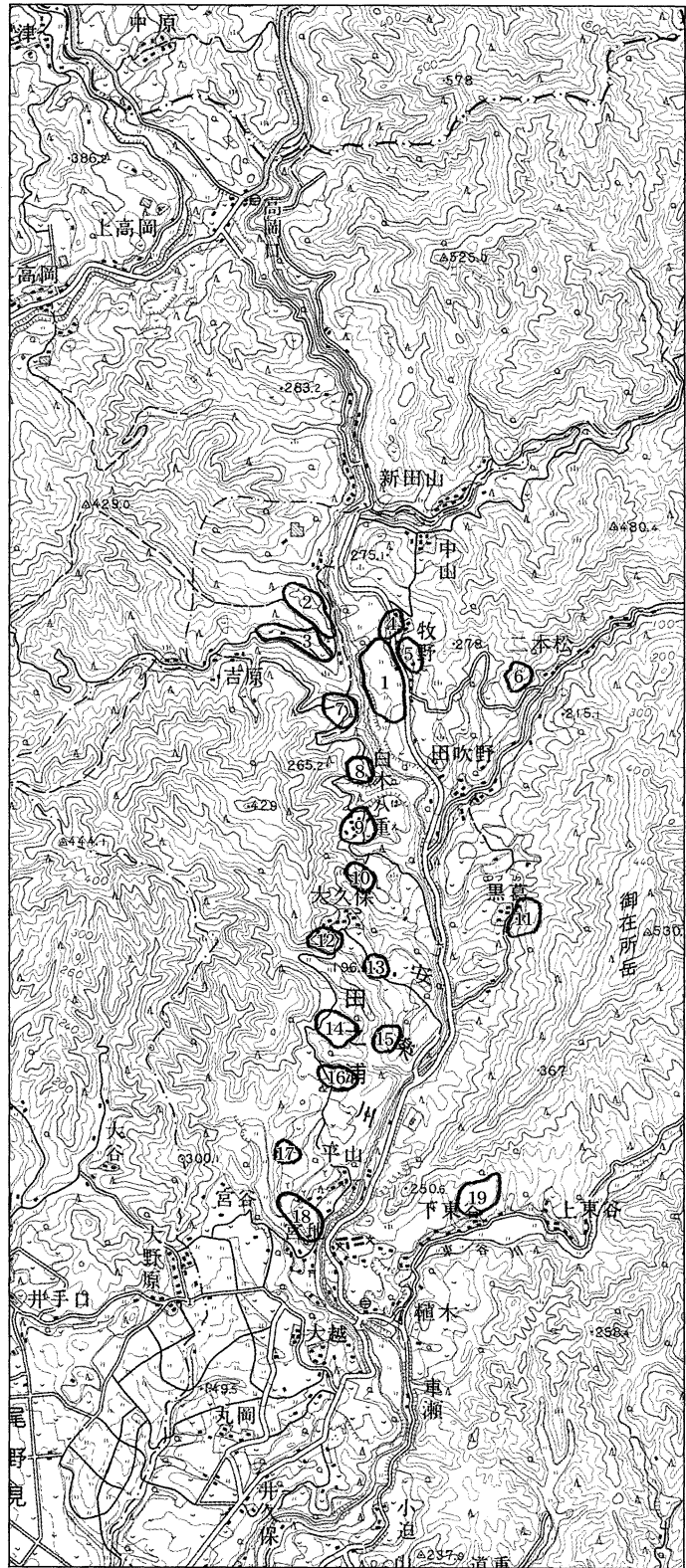
内門遺跡は、かつての分布調査で確認された遺跡であり、縄文土器が採集されている。吉原遺跡では、轟式土器や石斧の出土が知られ、倉野遺跡では、前平式、吉田式、山形押型文、塞ノ神式、轟式土器等の縄文早・前期及び晩期の遺物が確認されている。倉野遺跡の南に隣接する台地上には板山遺跡が存在し、押型文土器の破片が表採されている。白木原遺跡は台地奥の谷頭に立地し、押型文土器、平椀式系、塞ノ神式土器、石鏃等が出土している。白木八重遺跡からは楕円押型文土器が出土している。

安楽川上流域の遺跡の分布は、必ずしも台地辺縁部に立地しているとは言えない。上流域においては、山間の台地と安楽川の川底との比高差が約70～80mにも及び、切り立った急傾斜面を有する地が多い。そのため、台地辺縁よりも山稜と台地の基部付近に立地している例が見受けられる。

(参考文献)

- 志布志町教育委員会 『志布志の埋蔵文化財』 1985
- 志布志町教育委員会 『鎌石遺跡・田吹野遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1986
- 志布志町教育委員会 『飛渡遺跡・島廻遺跡・白木原遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 1988
- 志布志町教育委員会 『大長野B遺跡・白木八重遺跡・丸岡遺跡』
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(25) 1996

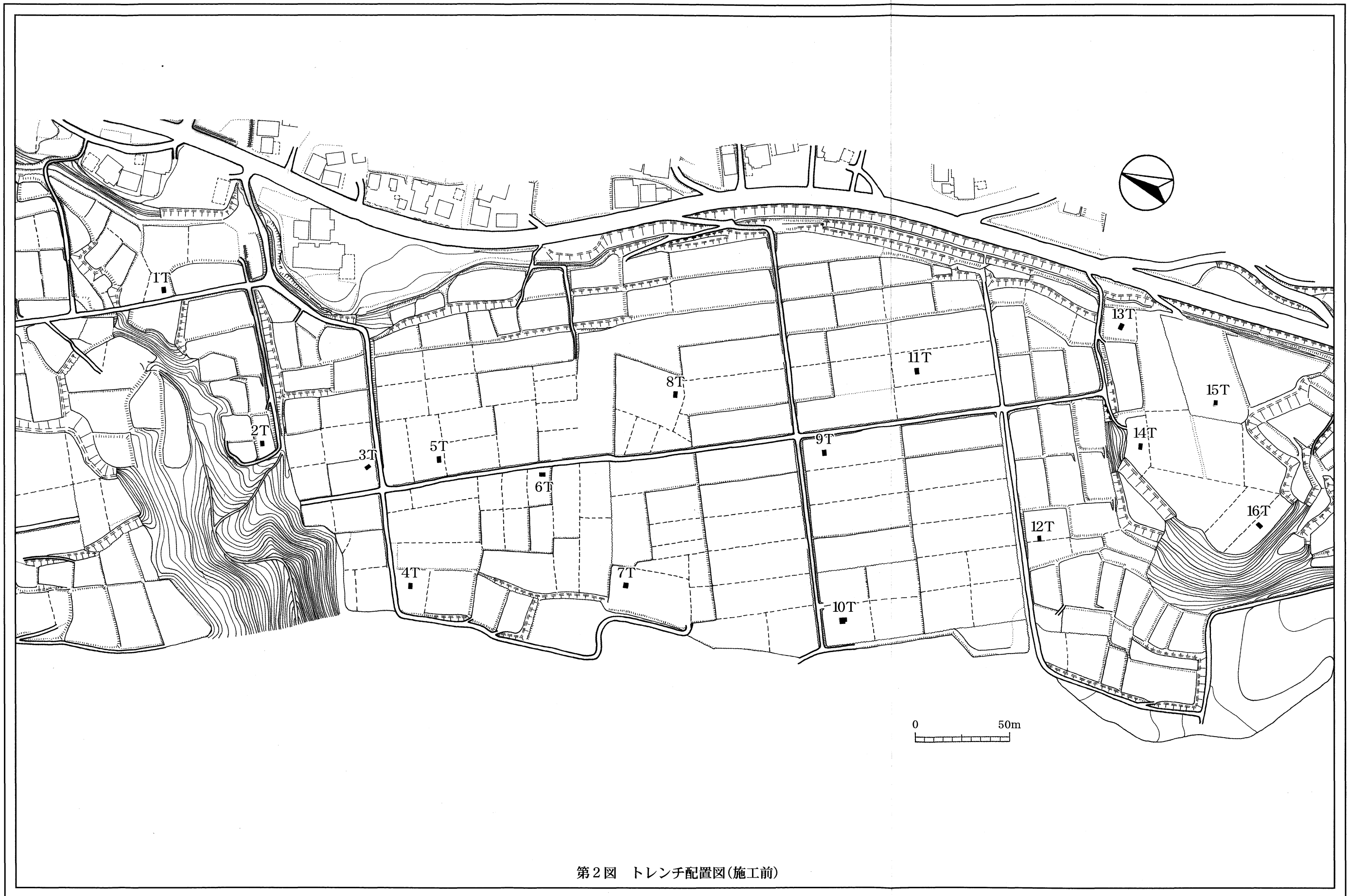
番号	遺跡名	時代
1	牧野	縄文(早)(後)(晩)
2	牧原	縄文(早)
3	吉原	縄文(前)
4	尾口	縄文
5	内門	縄文
6	田吹野	縄文(早)(前) 弥生
7	倉野	縄文(早)(前)(晩)
8	板山	縄文(早)
9	白木原	縄文(早)
10	白木八重	縄文(早)
11	黒葛	縄文
12	大長野A	縄文(早)
13	大長野B	縄文(早)
14	大長野C	縄文(早)
15	大長野D	弥生
16	平山A	縄文(早)
17	平山B	縄文
18	宮谷口	縄文(早)(前)
19	宮ヶ中	弥生



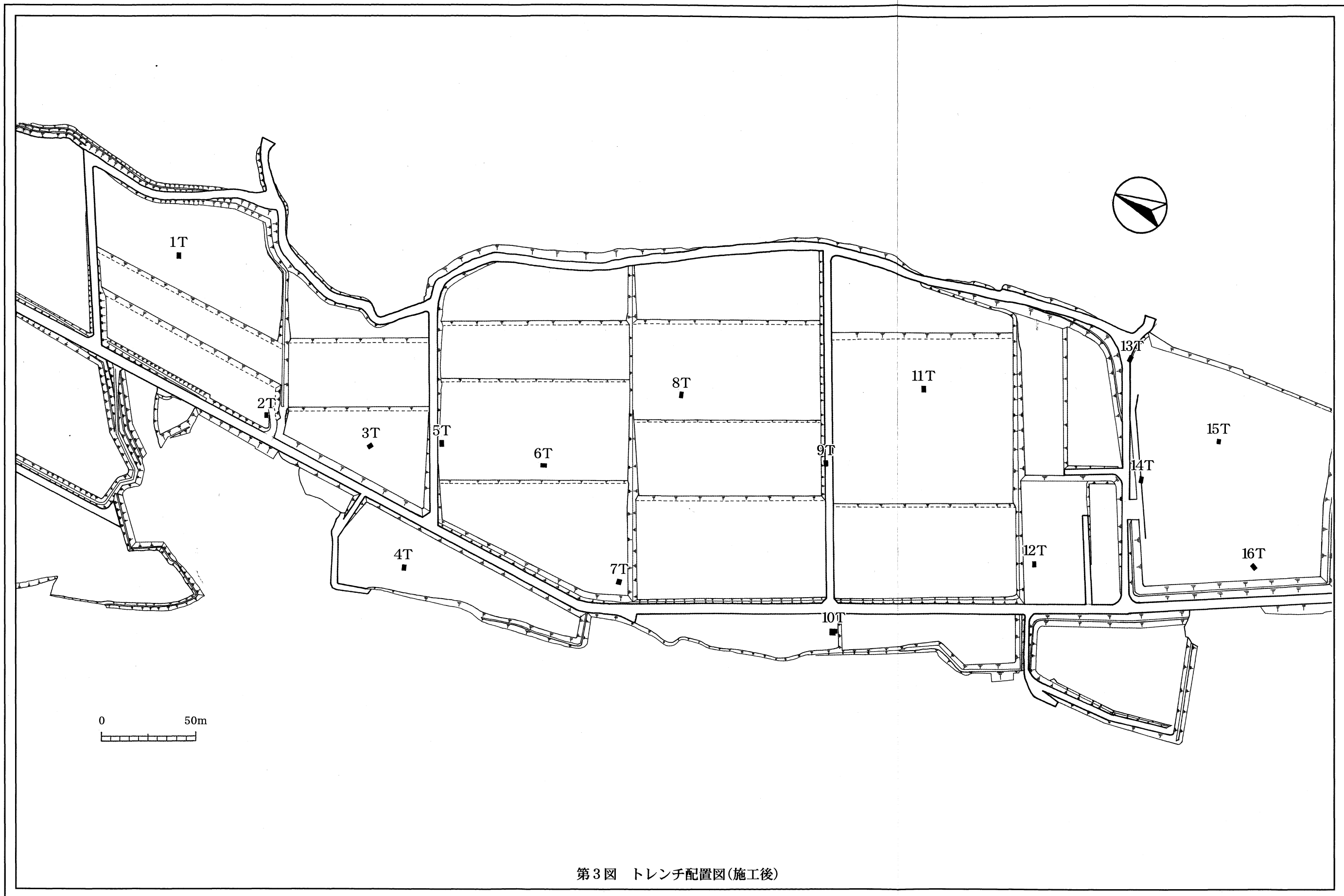
縮尺 = 1 / 50,000

第1表 周辺遺跡一覧表

第1図 周辺遺跡位置図



第2図 トレンチ配置図(施工前)



第3図 トレンチ配置図(施工後)

第三章 調査の概要

第1節 基本土層

I層:表土層。耕作土,旧耕作土,盛土である。

地点によっては,色調・硬度等により,a~g層に細分される。
耕作土層は水田として利用されており,地点によっては,数層の盤(鋤床層)が認められる。

II層:暗黄赤褐色土。軟質土である。地点によっては確認されない。

III層:明黒赤褐色土。地点によっては確認されない。

IV層:暗黄褐色土。ゴマシオ状の細粒火山灰を包含する。霧島起源の「御池火山灰」に比定される。

V層:黒褐色土。硬質土である。

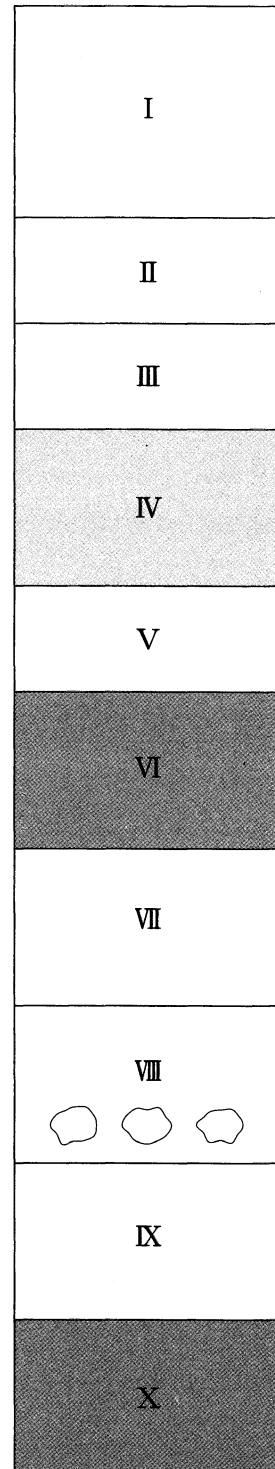
VI層:明黄橙色火山灰土。「アカホヤ火山灰」に比定される,火山灰土層である。下部には砂粒状のパミスを含む。

VII層:暗茶褐色土。若干硬質。縄文時代早期の遺物包含層である。
地点によっては,色調・硬度等によりa~c層に細分される。

VIII層:暗乳白色火山灰土。硬質土である。「薩摩火山灰」に比定される。地点によっては,a,b層に細分できる。

IX層:暗茶黒褐色粘質土。色調・硬度等によりa~c層に細分できる地点もある。

X層:暗黄褐色火山灰土。いわゆるヌレシラスである。



第4図 土層柱状図

第2節 調査の概要

調査区北西から南東方向に向かって設定した、16ヶ所のトレンチによって調査を実施した。詳細についてはトレンチごとに述べることとする。

【1トレンチ】

調査区北側端の水田に2×2mの規模で、海拔高約191.4mの地点に設定した。I層を掘り下げたところ、X層を検出したため調査を終了した。遺物・遺構は検出されなかった。

【2トレンチ】

1トレンチの南西側、約96mに2×2mの規模で海拔高約184.1mの地点に設定した。1トレンチ同様、I層を掘り下げるとX層が確認された。盛土が厚く堆積しており、個人の造成等により旧地形が変化していると考えられる。遺物・遺構は認められなかった。

【3トレンチ】

2トレンチの南側、約56mに2×3mの規模で海拔高約185.6mの地点に設定した。個人による削平等によるものか、II～V層については確認されなかった。しかしながら、VII～IX層については堆積状況が良好であった。遺物・遺構は検出できなかった。

【4トレンチ】

3トレンチの西側、約68mに2×3mの規模で海拔高約184mの地点に設定した。III層は認められなかったが、下層の堆積状況は良好で、VII層から縄文時代早期の遺物が数点出土した。

【5トレンチ】

4トレンチの東側、約76mに2×3mの規模で海拔高約185.4mの地点に設定した。堆積状況は良好でほぼ基本土層の準じていたが、遺物・遺構は検出できなかった。

【6トレンチ】

5トレンチの南側、約69mに2×3mの規模で海拔高約184.2mの地点に設定した。堆積状況は良好でほぼ基本土層に準じていたが、遺物・遺構は認められなかった。

【7トレンチ】

6トレンチの西側, 約63mに2×3mの規模で海拔高約185.6mの地点に設定した。個人による削平等によるものか, II, III層については確認されなかった。遺物・遺構は検出できなかった。

【8トレンチ】

7トレンチの東側, 約105mに2×3mの規模で海拔高約183.7mの地点に設定した。I層は数層に細分できたが, II層については認められなかった。III, IV層より縄文時代後・晩期の土器が十数点出土したため, 調査を中断した。

【9トレンチ】

8トレンチの南西側, 約92mに2×3mの規模で海拔高約181.4mの地点に設定した。I層を掘り下げたところ, II～IV層は認められず, 直下にV層を確認した。縄文時代後・晩期の土器が十数点出土したため, 下位層については掘り下げなかった。

【10トレンチ】

9トレンチの西側, 約93mに2×3mの規模で海拔高約180mに設定した。竪穴状遺構が検出されたため, 一部拡張した。竪穴状遺構の埋土はIV, V層であり, 若干の御池火山灰を包含していた。出土遺物から縄文時代後期頃の遺構と考えられる。

【11トレンチ】

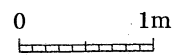
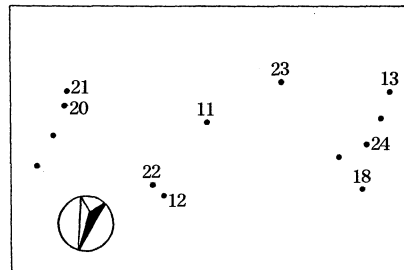
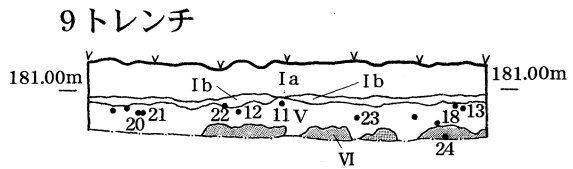
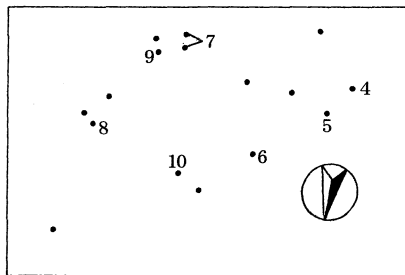
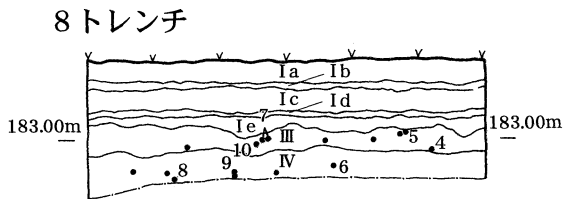
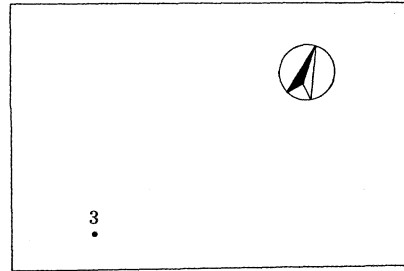
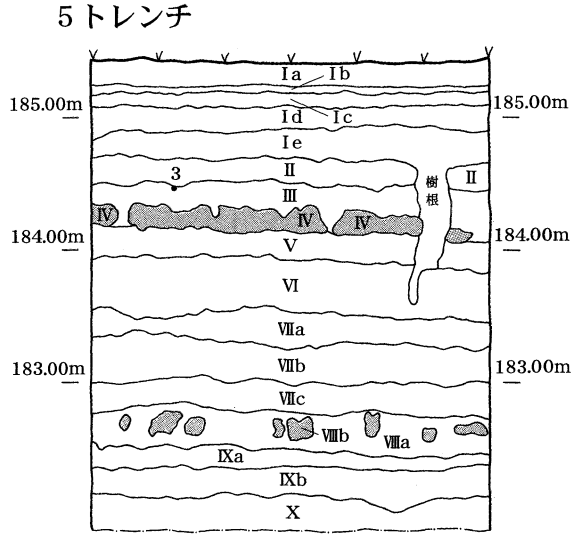
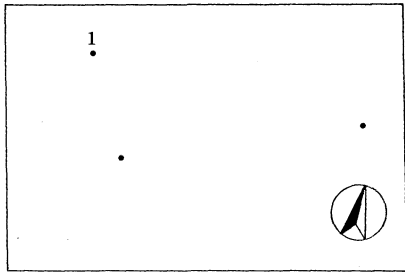
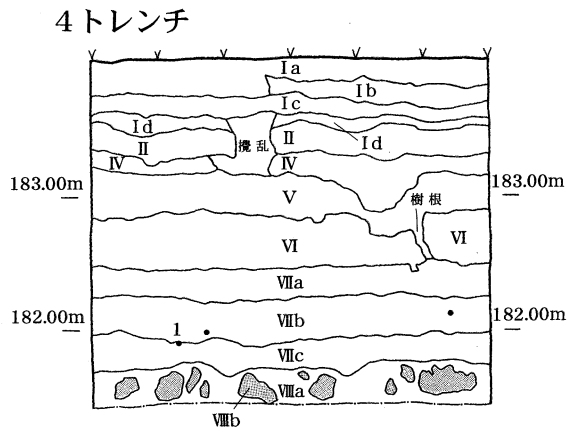
10トレンチの東南側, 約110mに2×3mの規模で海拔高約182.2mに設定した。一部攪乱も認められたが, ほぼ基本土層に準じた堆積状況で, 特にVII層の堆積は良好であった。しかしながら, 遺物・遺構とも検出できなかった。

【12トレンチ】

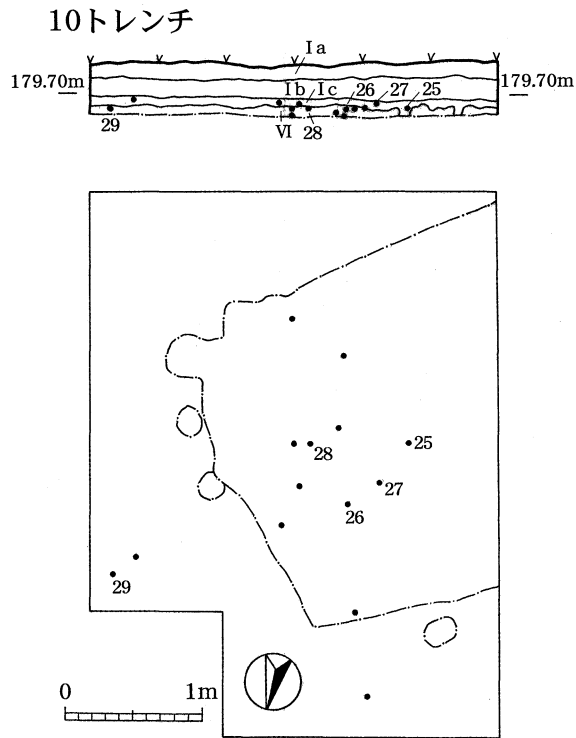
11トレンチの西側, 約135mに2×3mの規模で海拔高約178.4mに設定した。I層の盛土が厚く, 約1.2m堆積していた。遺物・遺構とも認められなかった。

【13トレンチ】

12トレンチの東南側, 約165mに2×3mの規模で海拔高約191.6mに設定した。断面観察から, 旧地形は傾斜地と推察された。ほぼ基本土層に準じていたが, 遺物・遺構とも検出できなかった。



第6図 トレンチ平・断面実測図



第7図 10トレンチ平・断面実測図

堆積のI層を掘り下げるとIX層であり、遺物・遺構とも認められなかった。断面観察によると、旧地形は傾斜地と推察された。

【14トレンチ】

13トレンチの西側、約63mに2×3mの規模で海拔高約191.5mに設定した。I層を掘り下げるとIX層であり、個人の削平等によるものか、II～VIII層については確認されなかった。遺物・遺構とも認められなかった。

【15トレンチ】

14トレンチの南東側、約48mに2×2mの規模で海拔高約191.7mに設定した。I層を掘り下げるとX層であり、遺物・遺構とも検出されなかった。

【16トレンチ】

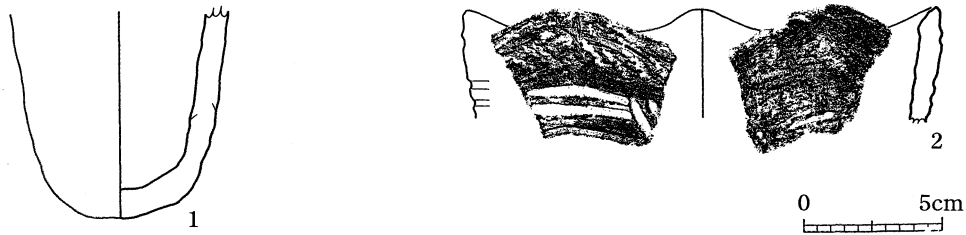
15トレンチの西側、約95mに2×3mの規模で海拔高約191mに設定した。厚い

第3節 遺物・遺構

遺物は4, 5, 8～10の各トレンチで確認され, 遺構は10トレンチのみで確認された。詳細についてはトレンチごとに述べることにする。

【4トレンチ】

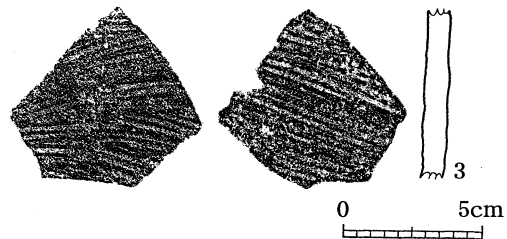
1は丸底の底部破片であるが, 縄文時代早期の遺物包含層であるⅦ層から出土した。上位の器形が明確ではないが, 類例の少ない資料と思われる。2は波状口縁で, 貝殻腹縁による刺突と数条の短沈線が認められる。



第8図 4トレンチ遺物実測図

【5トレンチ】

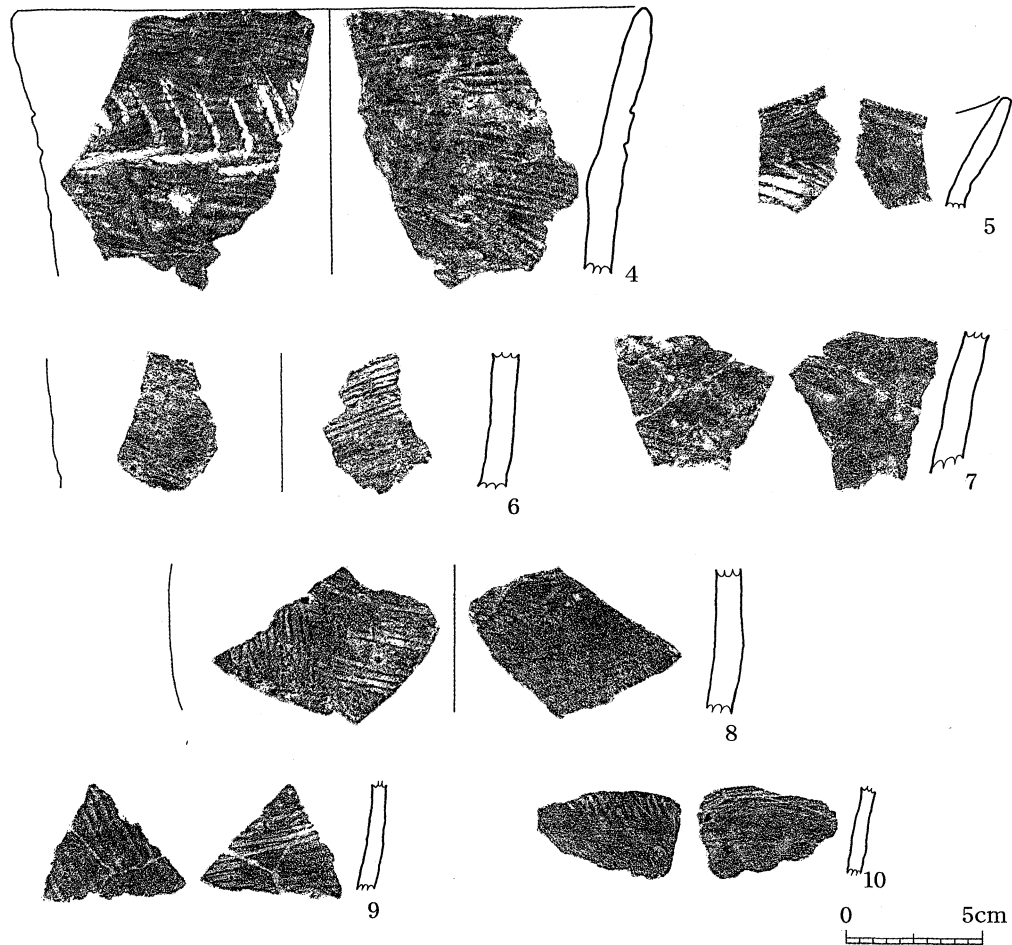
5トレンチでは土器片1点のみが出土した。3は内外面に貝殻条痕による調整を施す, 胴部破片である。外面は調整後, 荒いナデ仕上げをしている。



第9図 5トレンチ遺物実測図

【8トレンチ】

4は貝殻による器面調整を地文とし, 貝殻復縁の刺突文を施すものである。5は若干外反する口縁部で, 山形の口縁を呈する。不明瞭な屈曲部外面に短沈線が認められる。6は貝殻で器面調整した後, 外面をナデ仕上げしている。7も同様に貝殻で器面調整を行い, 内外面ともにナデ仕上げをしている。外面にはススが付着している。8は内外面に貝殻条痕のみられる胴部破片であるが, 外面は一部ナデが認められる。9は極めて薄手の胴部破片である。内外面に貝殻条痕を残すが, 荒いナデ仕上げがなされている。10は胴部と思われるが, 薄手で外面の一部に貝殻による条痕が残る。

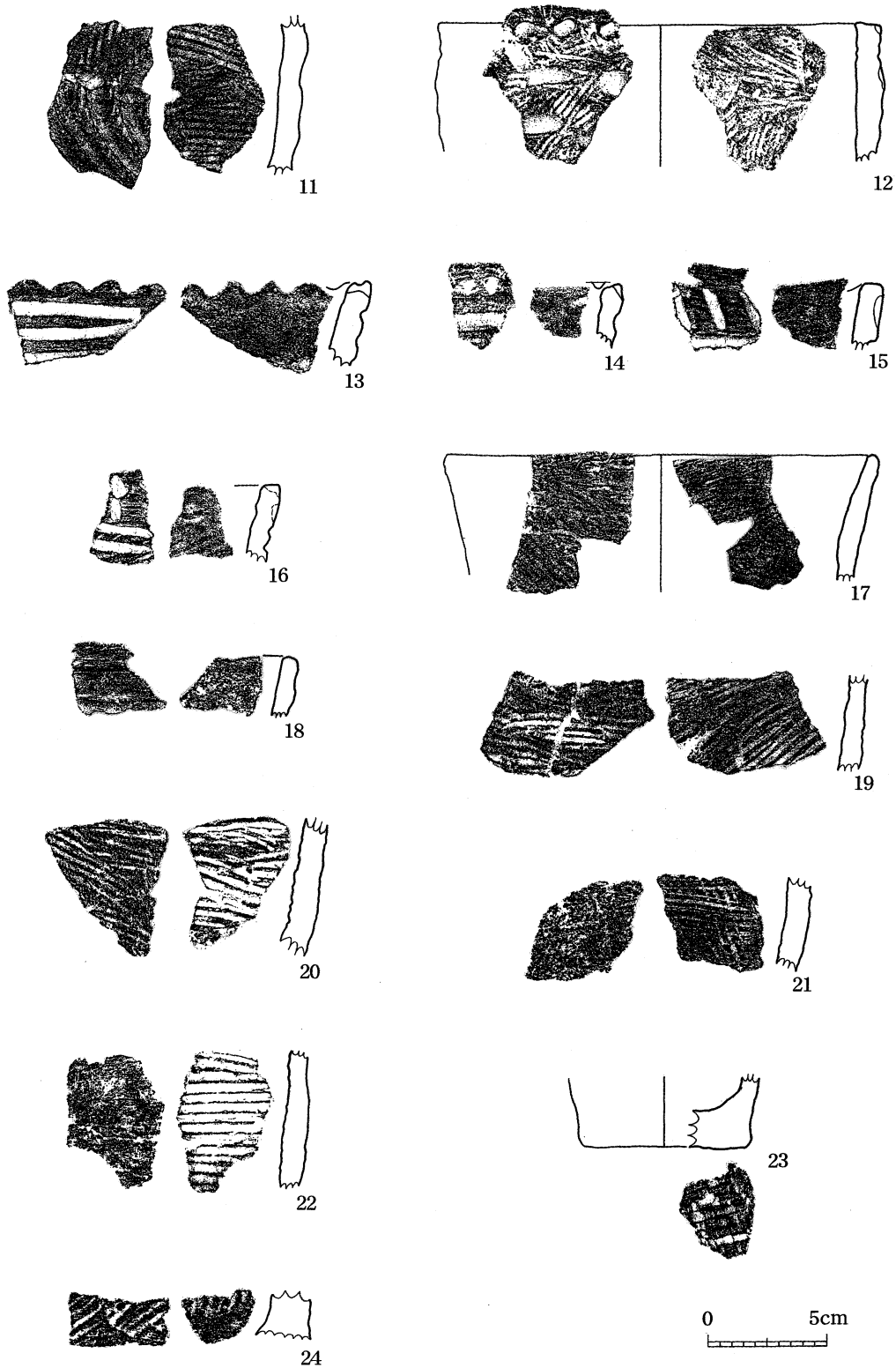


第10図 8トレンチ遺物実測図

【9トレンチ】

11は指頭大の曲線的な太形凹線文が施された胴部で、地文に貝殻条痕が認められる。太形凹線文は、曲線のカーブ部分で施文をいったん止めるか、施文具等を器面から離して、ひねるようにして施文方向を変える手法がみられる。12は直口する口縁部破片である。貝殻条痕を地文として口唇部に刺突文、口縁部に指頭大の押圧文が認められる。内面には凹凸がみられる。13は内外面にナデ仕上げが施される、波状の刻目口縁である。コの字状に折れる凹線文が認められる。14もナデ仕上げが施された口縁部破片であり、太形凹線文が認められる。12と同様に口唇部に刺突文が施されている。15は内外面ともにナデ調整が認められ、口縁端部に斜めに刺突文が施される。16は条痕を残し、口唇部および口縁部に刺突文が施され、2条の細形凹線文も認められる。17は外反する口縁部で、器壁が薄い。内外面ともに貝殻条痕を施した後、荒いナデ仕上げをしている。18は若干外反する口縁部で、ナデ調整が認められる。

19, 20は内外面に荒い貝殻条痕の残る胴部破片で、19の内面は荒いナデ仕上げをしている。21は外面に縦横に交差する条痕が認められ、内面はナデ仕上げである。22は内面に力強い貝殻条痕が認められ、凹凸がみられる。外面はナデ仕上げである。23は網代の認められる平底の底部破片である。24は底部破片で、外面には斜上に掻き上げるような条痕が認められる。



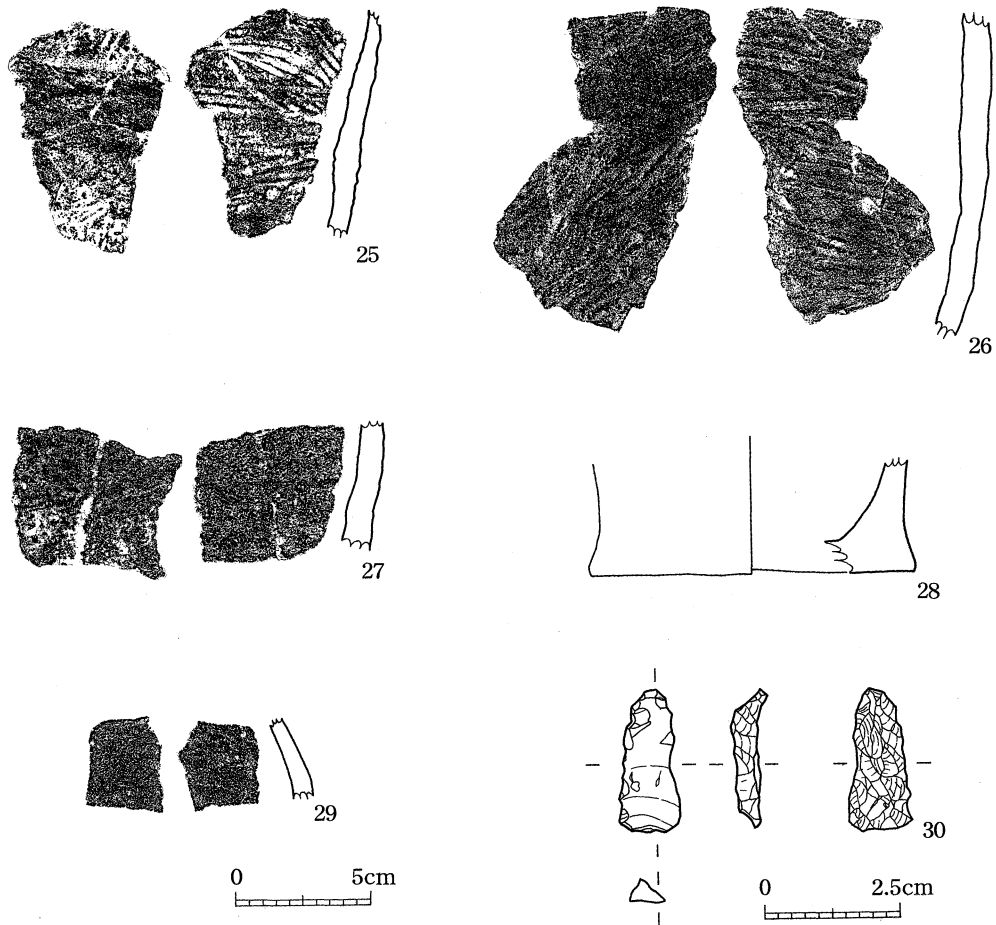
第11図 9トレンチ遺物実測図

【10トレンチ】

25, 26は内面に荒い貝殻条痕の残る胴部破片である。外面には荒いナデ調整が施されているが、一部には条痕が残されている。27も胴部破片であるが、外面は貝殻条痕を施した後、ナデ仕上げをしている。胎土に金雲母を含む。28は若干上げ底気味の底部破片である。内底部は丁寧にナデ調整されているが、外面には条痕が残されている。29は浅鉢の肩部と考えられる。薄手で、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されているが、若干摩耗している。30は黒曜石の剥片石器であるが、石材の質はあまりよくなく、気泡が認められる。

10トレンチでは、VI層面より1基の竪穴状遺構が確認された。本調査において唯一確認された遺構であり、一辺が約2mの方形プランを呈する。検出面より出土した土器から、縄文時代後期の遺構と推察された。

この遺構については、次年度以降の全面調査に際して調査することとし、今回の調査では平面検出のみを行い、現地保存に努めた。しかしながら、工事計画変更(盛土等による現地保存)により、遺跡の破壊を免れたため、竪穴状遺構も現地保存される結果となった。このため、遺構の詳細な調査はなされぬままになっている。



第12図 10トレンチ遺物実測図

第4節 総括

牧野遺跡は『志布志町誌』(上巻)^(注1)に記載され、早い時期より『周知の遺跡』として捉えられていたが、本格的な調査が実施されることはなかった。『志布志の埋蔵文化財』^(注2)においても、表採あるいは出土の縄文、弥生土器の細片、石斧等の記述があるのみで、詳細は不明であった。

今回、中山間地域総合整備事業に伴い、前・後期2回の広範囲に渡る確認調査を実施したことで、遺跡の範囲を特定することができた。また、少量ではあるものの遺物が確認され、遺跡の時期も縄文時代早、中～晩期に渡っていることが確認された。

出土遺物は少量の破片のみであるため、遺跡の性格を論じるには不十分であるが、特徴的なものを挙げると、1は縄文時代早期の包含層であるⅦ層より出土し、型式不明で類を見ない例と思われる。

11は指頭大の太形凹線を施し、施文具をひねるようにして施文方向を変え、曲線文を施す手法が特徴的である。指頭大の押圧文を施された12も同類と考えられ、縄文時代中期の阿高式土器の系譜をひくと捉えられる。11、12とも志布志町宮ノ前遺跡で確認され、宮ノ前タイプ^(注3)と呼称される例に類似する。

13、14はやや肥厚する口縁部であり、波状の刻目口縁、あるいは口唇部に刺突文が施されている。ナデ仕上げされた口縁部はわずかに厚みを持ち、凹線文が施される。末吉町宮之迫遺跡^(注4)で類例が確認されているが、阿高式土器の最終段階に類似し、阿高式土器を踏襲したものと考えられる。

15、16に見られるような口縁部に縦位の短沈線を施し、細形凹線を有するものは、末吉町宮之迫遺跡出土の宮之迫D類^(注5)に類似する。阿高式土器の影響を受けて成立した岩崎下層式土器は、口縁部に凹点文が施される。本遺跡では明確な岩崎下層式土器は確認されていないものの、15、16は阿高式、岩崎下層式土器の影響を受けて後続^(注6)するものと考えられる。

11～16は、一部でナデ仕上げを行いながらも、意図的に貝殻条痕を残すことで地文としての条痕を採用しており、阿高式土器の影響を受けた地域性の強い土器として捉えられる。

2、4のように外面に貝殻条痕を施し、貝殻腹縁による刺突文、沈線等を施した土器は、在地系土器である市来式土器として捉えられる。5も同類と考えられるが、口縁部に貝殻刺突文が施されない。口縁部は断面三角形を呈さず、特徴的な文様帯も持たない。また、口縁部の肥厚が控えめでやや外反するなど、市来式土器のなかでも最終段階に含まれると考えられる。

縄文時代中期以降、西九州を中心として阿高式土器の影響を色濃く受けた土器群が、広範囲に渡って発達した。南九州においては、阿高式土器の影響を受け、地文としての条痕を採用した地域色の強い土器が発達している。遺物点数が少なく断片的ではあるものの、牧野遺跡においても阿高式土器の影響と、地域性の強い土器の存在を窺い知ることができた。

(引用文献)

- 注1 志布志町教育委員会『志布志町誌』(上巻) 1972
注2 志布志町教育委員会『志布志の埋蔵文化財』 1985
注3 志布志町教育委員会『宮ノ前遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 1975
注4 末吉町教育委員会『宮之迫遺跡』末吉町文化財報告書2 1981
注5 注4に同じ
注6 志布志町教育委員会『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 1985

(参考文献)

- 鹿児島県教育委員会『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44) 1987
鹿児島県教育委員会『中ノ原遺跡(I)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48) 1989

第2表 土器観察表

トレンチ	番号	器形	層	胎土	色調	調整	焼成	備考
4	1	不明	VII	角閃石・長石・石英	明茶色	ナデ・工具ナデ	不良	型式不明, 粘土継目
	2	深鉢	一括	角閃石・長石	暗茶色	条痕ナデ	不良	波状口縁, スス付着
5	3	深鉢	III	角閃石・長石	茶色	条痕ナデ・ナデ	やや不良	スス付着
8	4	深鉢	III	角閃石・長石・石英	茶黒色	条痕ナデ	良好	刺突文, スス付着
	5	深鉢	III	角閃石・長石	暗赤褐色	荒い条痕ナデ	良好	波状口縁
	6	深鉢	IV	角閃石・長石	黒褐色	ナデ・条痕ナデ	良好	
	7	深鉢	III	角閃石・長石	淡黒色	ナデ	良好	多量スス付着
	8	深鉢	IV	角閃石・長石	明茶色	条痕ナデ・ナデ	やや不良	
	9	深鉢	IV	角閃石・長石	明黄茶色	条痕ナデ	不良	
	10	深鉢	III	角閃石・長石	明茶色	ナデ・工具ナデ	良好	
9	11	深鉢	V	角閃石・長石	黒褐色	工具ナデ・条痕ナデ	不良	凹線文, 内面凹凸
	12	深鉢	V	角閃石・長石・石英	暗茶色	条痕ナデ	良好	押圧文
	13	深鉢	V	角閃石・長石	明茶褐色	ナデ	やや不良	刻目口縁
	14	深鉢	一括	角閃石・長石・石英	黒褐色	ナデ	やや不良	口唇刺突文?, 凹線文
	15	深鉢	一括	角閃石・長石	黒茶色	ナデ	良好	刺突文, スス付着
	16	深鉢	一括	角閃石・長石	淡黒色	条痕ナデ・ナデ	良好	口唇刺突文, 凹線文
	17	深鉢	一括	角閃石・長石・石英	黒褐色	条痕ナデ	良好	
	18	深鉢	V	角閃石・長石	淡黒色	ナデ	良好	
	19	深鉢	一括	角閃石・長石	暗黄茶色	条痕ナデ	良好	スス付着
	20	深鉢	V	角閃石・長石	黒褐色	条痕ナデ	良好	内面凹凸
	21	深鉢	V	角閃石・長石	茶色	条痕ナデ?	不良	外面やや摩滅
	22	深鉢	V	角閃石・長石	暗茶色	条痕ナデ	不良	内面凹凸
	23	深鉢	V	角閃石・長石	明茶色	丁寧なナデ	良好	底部, (網代)
	24	深鉢	VI	角閃石・長石	暗茶色	ナデ・工具ナデ	やや不良	底部
10	25	深鉢	IV, V	角閃石・長石・石英	茶褐色	条痕ナデ	やや不良	
	26	深鉢	IV, V	角閃石・長石・金雲母 黒曜石	黒褐色	条痕ナデ	不良	スス付着
	27	深鉢	IV, V	角閃石・長石・石英 金雲母	黄茶褐色	条痕ナデ・ナデ	やや不良	スス付着
	28	深鉢	IV, V	角閃石・長石・石英	明茶色	条痕ナデ・ナデ	良好	底部
	29	浅鉢	IV, V	角閃石・長石	黄茶色	丁寧なナデ	良好	内外面やや摩滅

あとがき

牧野遺跡は確認調査後に事業計画が変更され、遺跡が保全されるという幸運な遺跡であった。遺跡の全容を知ることはできなかったが、遺跡保護としては言うまでもなく良い結果になった。

私はこれまで主体となって報告書を作成した経験がなく、本格的に報告書を作成するのは初めての経験だった。最高の出来であるはずもないが、未熟なりに最善を尽くしたものになっていれば、幸いである。本書の作成にあたり右往左往しながら身につけたことを、次回の報告書に活かして、より良い報告書を作っていかなければならないと思う。

文末ではありますが、本書を作るにあたって御指導・御助言を賜った方々に、心より御礼申し上げます。また、2度の調査に参加していただいた作業員並びに整理作業員の方々にも、心からの感謝を申し上げます。

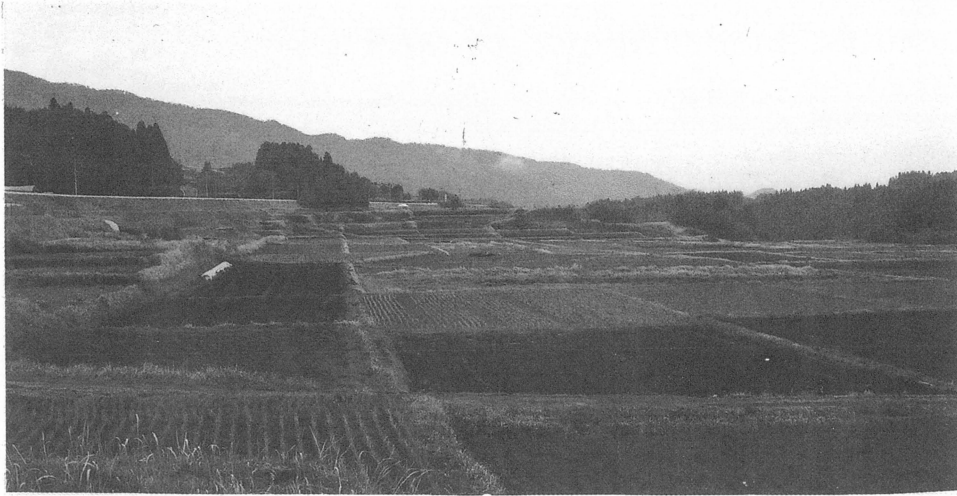
〈発掘作業員〉

安楽えつ子・生重美恵子・伊藤初恵・岩切セツ子・上杉みゆき・片村光子・五代正巳・児玉明・柴洋子・下山エル・田之上鈴子・樽野次子・坪田和子・水流トシ子・西川末広・馬場厚子・浜田まさ子・早瀬久子・春口繁・春口ノリ子・春口フミエ・春口峯次・春口稔・松清正子・見野三千子・森川チドリ・山村照男・山村又男

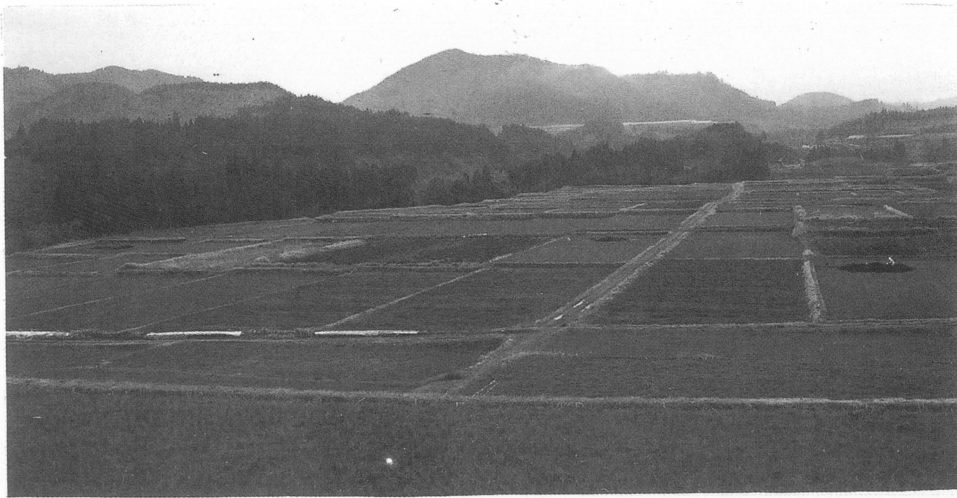
〈整理作業員〉

生重美恵子・上杉みゆき・大久保泉・木上美樹子・見野三千子

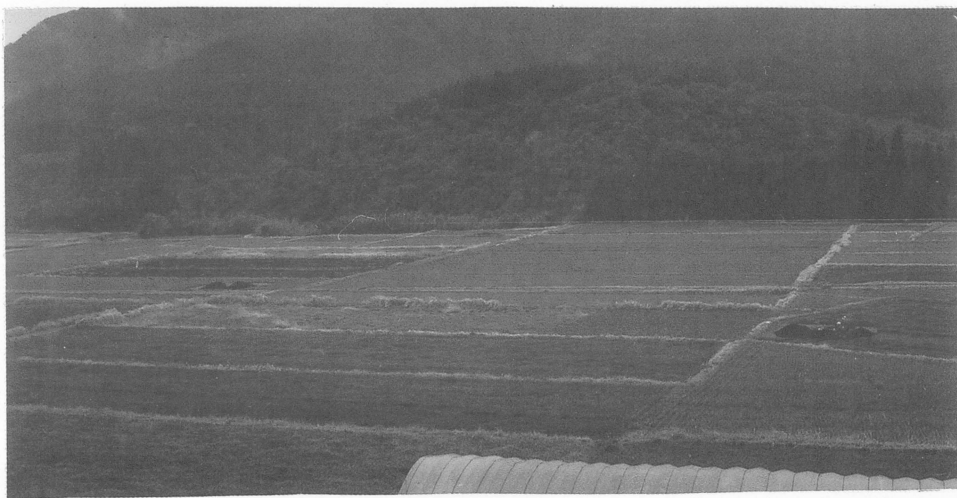
写真図版



遺跡近景(北より)



遺跡近景(南より)

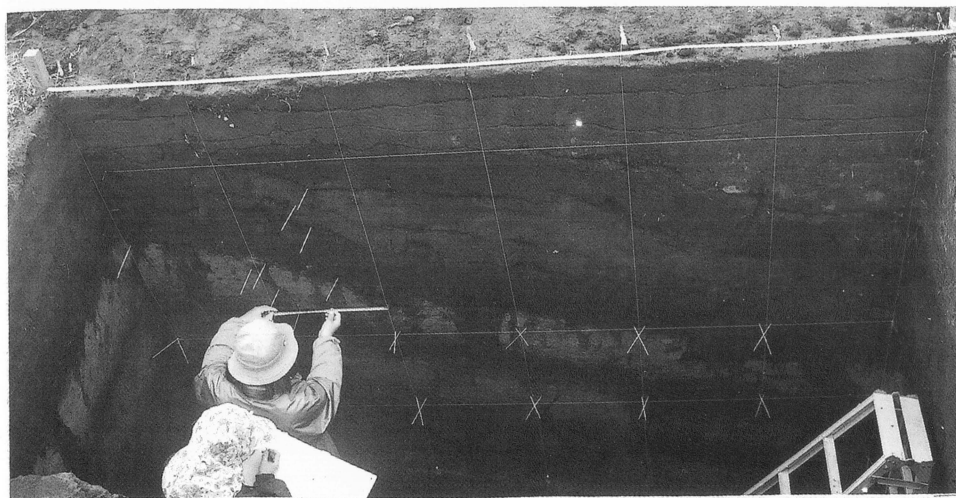


遺跡近景(東より)

図版2



5トレンチ作業風景



13トレンチ作業風景



14トレンチ作業風景

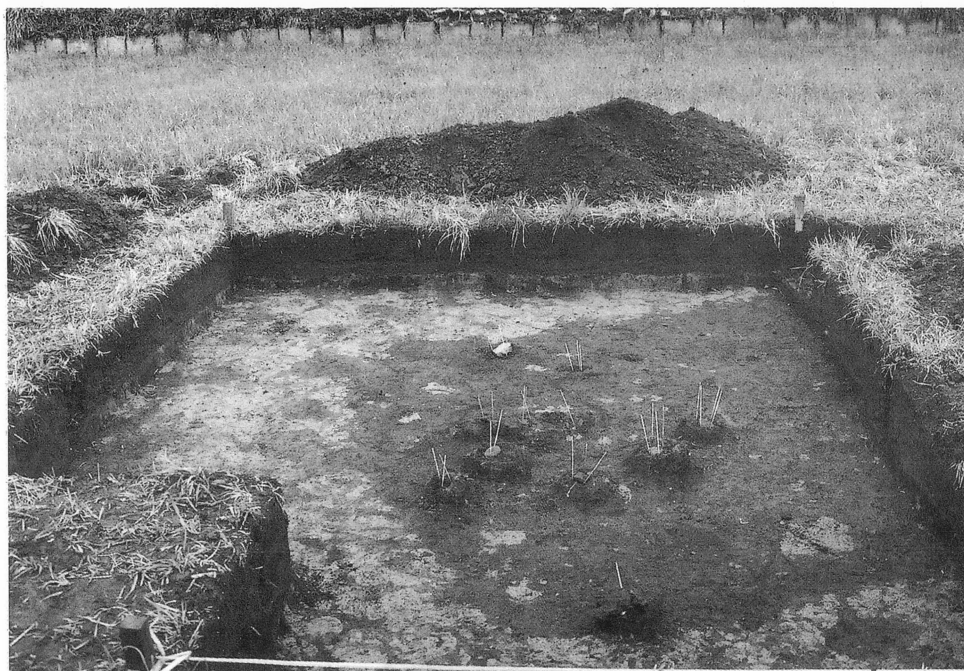


8トレンチ遺物出土状況



9トレンチ遺物出土状況

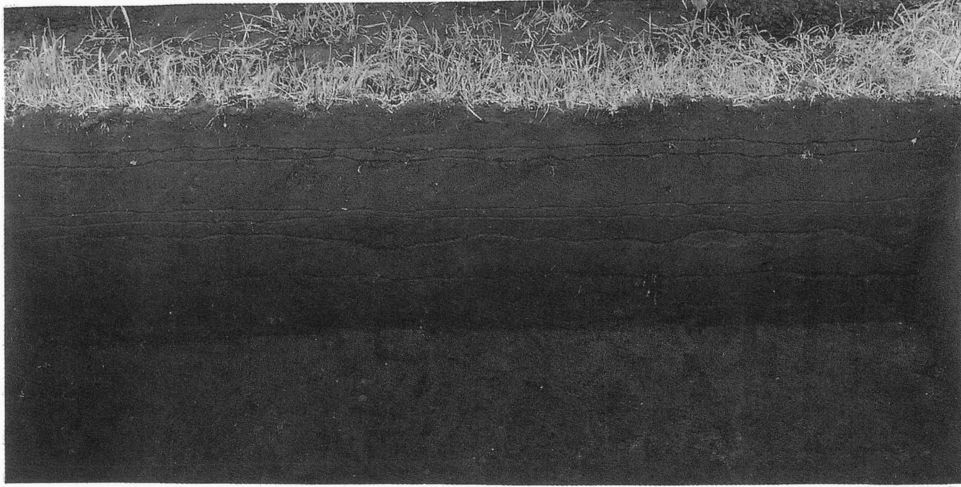
図版 4



10トレンチ遺物出土状況



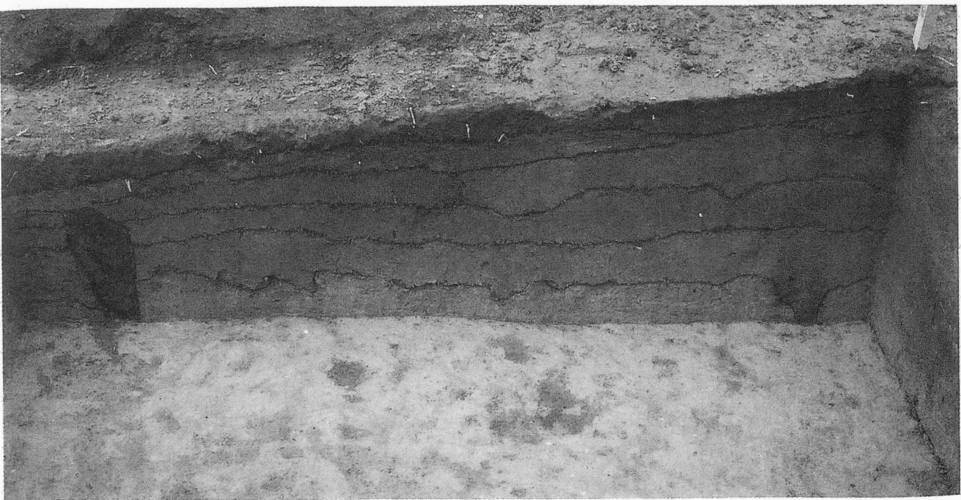
10トレンチ遺構検出状況



8トレンチ土層断面

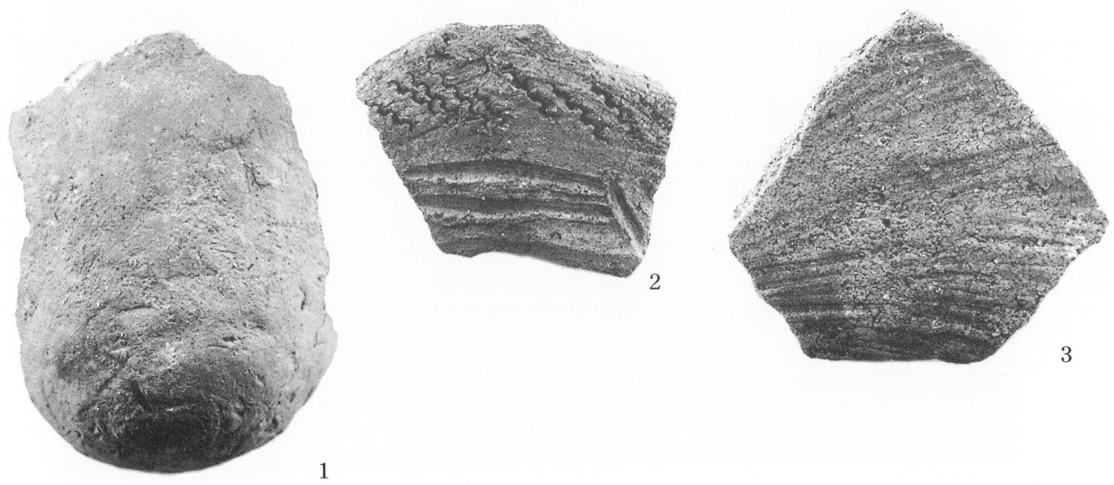


11トレンチ土層断面

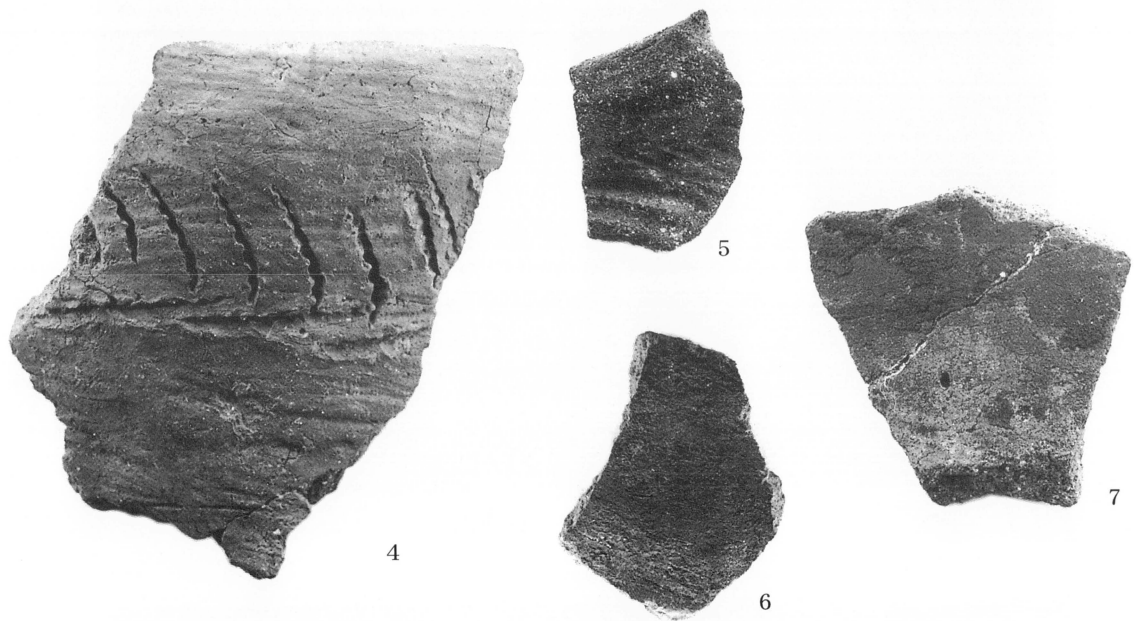


14トレンチ土層断面

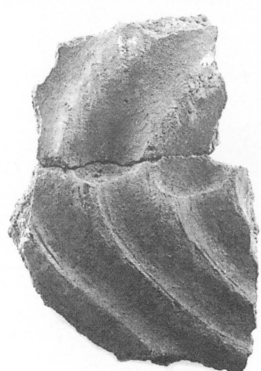
図版 6



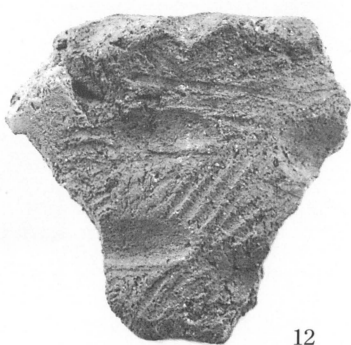
4・5トレンチ出土遺物



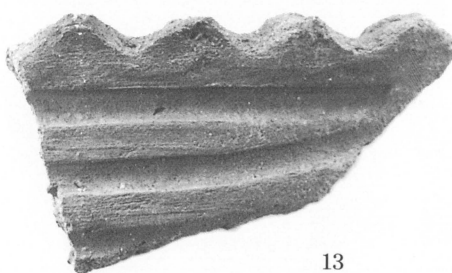
8トレンチ出土遺物



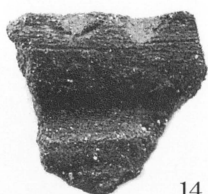
11



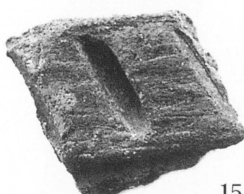
12



13



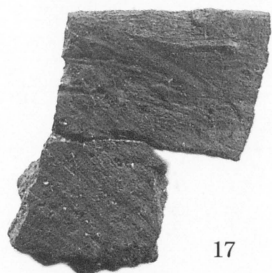
14



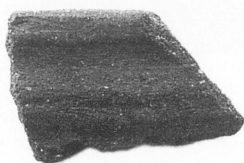
15



16



17



18



19



20



21



22

9トレンチ出土遺物

図版 8



23



24



25



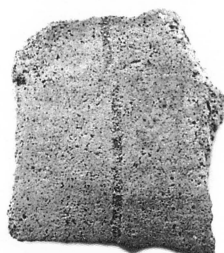
26



27



28



29



30

9・10トレンチ出土遺物

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(30)

牧 野 遺 跡

発行日 平成14年3月

発 行 志布志町教育委員会(鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号)

印刷所 志布志印刷有限会社(鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966-2)